

ロウきゅーぶ！～バスケットはないけど大丈夫だよね～

秋兎。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロウきゅーぶ!の二次創作

二次創作初作品なので暖かく見守って頂きたいです!

バスケの要素ゼロです。

高校入学を間近にし、両親を事故で亡くした主人公の高嶺 徹(たかみね とおる)が湊家に引き取られ「ロウきゅーぶ!」のキャラクターター達との日常を描く物語です。

# 目次

出会い。	1
初登校！	9
長い1日と勉強会！	18
智花の友だち	26

出会い。

目の前には、白木の門がそびえ立つ。門の右柱には、木製の板に「湊」と刻まれた名札が取り付けられていた。そう、この純和風建築の家こそが、俺が今日からお世話になる湊家である。

「いざ家の前まで来るとやっぱ緊張しちゃうな・・・」

おろしたての茶色いスーツに身を包み白いシャツに赤いネクタイを合わせ、自分が持っている服の中でも一番の正装でこの場所に立っている。

駅を降りてから、住宅街の中を歩いて来たが、規模だけで言えばこの家が1番の大きさだろう。和風ということもあり、そこはかとないう庄厳さに包まれている。

だが、このままここにいるわけにもいかない。門に近付き、インターフォンを押して反応を待つ。

『はい』

「こ、こんにちは。本日からこちらでお世話になる高嶺徹です」

『おー、徹くんか！ 遠い所からよく来たね。入りたまえ』

「はっ、はい！」

聞こえてきた声はこの家の主人——湊忍（みなと しのぶ）さんのものだった。両親の葬式で一度顔を合わせただぐらいの関係だが、落語家である忍さんの声はとてもよく通る。分かりやすい声質だったため、すぐに誰だか理解した。少し上ずった声で名乗ってしまったが、忍さんは明るい口調で迎え入れてくれた。

美しく整えられた庭を眺めながら玄関までの石畳を歩く。隅々まで手入れが施されていてとても綺麗な風景だ。

「お、お邪魔します」

玄関まで来ると引戸が開いていたのでそのまま中に入る。

「いらっしやい。今日から家の子としてよろしく頼むよ」

目の前で腕組みをして立って迎えてくれたのは、先ほどの声の主である忍さん本人。その出で立ちは、まさにこの家の主人である事を物語っている和装をまもっていた。

「お久しぶりです。徹さん」

すると、後ろから一人の女性が近付いて来た。

静かに微笑むこの人は、湊花織（みなと かおり）さん。忍さんの奥さんだ。

2人は俺の両親の高校の時の同級生だった。両親が亡くなり、親戚もいなくて行くあてのなかった俺を、養子として預かると言ってくれた。

最初は、新しい環境で暮らしていく事や、養子になって苗字が変わる事への迷いがあったのだが、両親からは以前から友人の話を聞かされていたため二人のことは知っていた。

信頼されていた二人であつたからこそ、俺自身もここに来ることを決意したのだ。現にこうして家庭に迎え入れてくれたことにはとても感謝している。その恩をここで暮らす中で出来る限り返していけたらと思う。

玄関で一通りの挨拶を済ませると、家の中へと案内される。外から見た通り、やはり中も相当広い。廊下を進んで行くと前を歩いていた花織さんが足を止めた。

「ここが、今日から徹さんの部屋です」

襖を開けて中に招き入れられる。部屋の中は、六畳ほどの大きさで隅の方にテーブルと反対側にはタンスが置かれていた。

「部屋にある物は自由にお使いください。あとで布団もお持ちしますので」

「ありがとうございます」

何だろう、この部屋に入ってからというもの少し懐かしい感じがする。

「徹くん、君がこの部屋を使うのは…いや、この家に来るのは2度目なのだが覚えているかね？」

「えっ!?!?」

後ろにいた忍さんが意外な事を聞いてきた。確かに、懐かしい気はしていたが気のせいでは無かったようだ。

でも、いつ来たのだろう。

「徹さんが、まだ小学校一年生ぐらいの時に一度お父さんとお母さん  
とで遊びに来た事があるんですよ」

「そうだったんですか。……すみません。全然覚えていなくて」

「うふふ、覚えてなくても無理はありませんよ。あんなに小さかった  
時の事ですから」

「あの徹くんが、こんなに立派になるとは。あいつの面影がある」

忍さんのいう「あいつ」というのは、父さんの事だろう。周りからはよく似ていると言われてきたからな。

「でも、髪はお母さん譲りですね」

花織さんは、優しく俺の髪に触れた。少しフワフワした髪質は母親譲りで、小さい時はコンプレックスだったが、今となっては自慢の髪質だ。

2人にじつと顔を見つめられ、少しこそばゆくなってきた。

「あ、そういうえば。家に来た時に撮った写真があつたはずです。少し待っていてくださいね」

そう言うと、花織さんはスタスタと部屋を出て行ってしまった。待っている間に荷物の整理でもしようと思つてと鞆を広げる。荷物は大した量はなく、最低限の物しか持ってきていない。

しかし、こんなにいい部屋に住まわせてくれるとは思つてもみなかった。前にいた家よりも正直豪華だ。

「花織が戻ってくる前に、着替えてはどうだろう。今日から君は、家の家族になるのだからもう少し楽しんでくれても構わんよ」

「お気遣いありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます」

「ああ。もし、必要な物があれば遠慮せずに言ってくれ」

「はい」

失礼ながらも、暖かい微笑みを向けてくれる忍さんの前でさっそくスーツを脱ぎ、部屋着へと着替え始める。

優しいな。忍さんも花織さんも本当の家族みたいに接してくれる。この二人なら父さんも母さんも安心して見守ってられるだろう。でも、やっぱり二人をお父さん、お母さん呼びにするには相当な時間がかかると思う。しばらくは今まで通りになってしまいうだろうな。そんな事を考えながらきつちりとしたスーツ姿からラフなパーカー姿へと着替えた。

着替えを終えて、しばらく忍さんと雑談混じりの会話をしていると、

「お待ちせしました〜」

花織さんが一冊のアルバムを持って戻って来た。目の前でアルバム開き、写真を見せられる。

そこには、小さい頃の俺と、父さんと母さん、忍さんと花織さんが写っていた。

そして、

「あの、花織さんが抱っこしている子は？」

写真の中の花織さんは、一人の女の子を抱っこしていた。

「ふふ、その子は娘の」

ガラガラガラ

『ただいまー』

質問の答えを聞く瞬間、玄関が開く音と同時に声が聞こえてきた。

—————

なぜ、こうなった。

現在、俺の目の前には、ほくろがチャームポイントなショートカットの女の子が机を挟んで宿題に取り組んでいる。

この子の名前は、湊智花（みなと）ともか）ちゃん。二人の娘で、この町にある慧心学園の初等部に通う六年生。

智花ちゃんが帰ってきてすぐに、忍さんは仕事へ、花織さんは夕飯

の買い出しへと出かけて行ってしまった。

今いる部屋は、なんと智花ちゃんの部屋だ。智花ちゃんの部屋は、俺の部屋から見て廊下を挟んだ正面にある。2人の親睦を深めるとかで忍さんが、提案したらしい。

そして、一人でいるのは、暇だろうからという理由で花織さんが智花の部屋にいるようにと言い残していった。

それにしても、見ず知らずの男を部屋に上げるといのは智花ちゃんにとっては中々のハードルだろう。だけど、拒まれなかったという事は嫌われてはいないのかな？

しかし、部屋に上がってから互いに自己紹介した後は、現在のような沈黙が続いている。一応、これからは兄妹関係になるのだからもう少し仲良くなりたいな。

「(よし!) …智花ちゃん?」

「は、はいっ!?」

おっと、急に話しかけてしまったのでビックリさせてしまっただろうか。

「気になってたんだけど、建物も入り口も純和風なのにこの部屋だけ少し洋風な感じがするんだけど何でなのかな?」

この部屋の中は、俺の部屋と違いフローリングのモダンな部屋になっっていた。

「えと、私が産まれてすぐ、この部屋だけリフォームしてくれたそうです」

なるほど、確かに小さい子供にとっては洋室の方がなにかとつかいやすいかもしれんな。ご両親の愛情を感じる話である。

「そっか」

「はい」

………会話終了。

くそう、何で俺はこんなにもコミュニケーションを取るのが下手なんだ。今すぐ自分を殴ってやりたいくらいだ。

だが、ここで神様が見ていてくれたのか逆転のチャンスが訪れた。

「あのう」



目の前にいた智花ちゃんに急に声をかけられた。どうしたのかと思いい、顔を上げると智花ちゃんは先程までスラスラ動かしていた手を止めてこちらを見ていた。

「ん？」

「い、今算数の宿題をしていたんですけど、最後の問題がどうしても解けなくて。も、もし宜しければなんですけど、教えて頂けませんか？」

智花ちゃんは、顔を赤らめながらお辞儀をした。

当然俺の答えは、

「うん、いいよ」

「あ、ありがとうございます！」

「じゃあ、隣座つてもいいかな？」

「は、はい。どうぞ」

智花ちゃんは、俺が立ち上がると同時にススツと座つていた位置からずれて空間を開けてくれた。俺は、そこに座り問題を見る。小学校で習う範囲なら大丈夫——

「——んん？」

問題を読み終わるとある事に気づく。これ、中学レベルの問題だ。明らかに、俺が小学科の時に習っていた算数とは、レベルが違う。

智花ちゃんの通う慧心学園は、進学校と聞いていたがここまでとは、だが、解けない問題ではない。落ち着け。

「…徹さん？」

「智花ちゃんごめん、ちょっと計算書かせてくれる？（何気に、今名前と呼ばれなかったか!?）」

「はい、大丈夫です…よっ!?」。

シャーペンを借りてノートの余白にメモを取りながら計算を始める。中学レベルとはいええ、もう高校生なんだ。とりあえず、小学生で習った時の式を使つて——

…ふう。何とか理解した。これで分りやすく説明できるはずだ。

「お待たせ、この問題はね…んん？智花ちゃん？」

「~~~~」

顔を横に向けると、智花ちゃんは頬を真っ赤に染め、肩をすくめて

縮こまっていた。

どうしたんだろう、もしかして夏でもー

「あーごめんっ!」

ようやく自分の愚行に気が付いた。

気づけば俺は、問題を解くのに夢中でお互いに肩を密着させて、凄く近い距離にいた。

「い、いえっ。大丈夫、です…」

すぐに距離を取り、反省する。

「…そっか。なら良かったよ。じゃあ、解説始めるね」

「は、はいっ!よろしくお願いします」

智花ちゃんはすぐに笑顔を取り戻しこちらに向き直ってくれた。

解説を終え、宿題も終わり一息着く。

気づけば、智花ちゃんと普通に話せるようになっていた。

「智花ちゃんは、俺がこの家に来ることについてどう思った?」

「えっ?」

これから先、一緒に住んで行く以上聞かずにはいられなかった。智花ちゃんにとって急に年の離れた兄ができるというのは抵抗があるのかもしれない。会ってからずっと考えていた。

俺は、こんなに可愛い妹ができて嬉しいけど、本人の心境はどうなのだろう。

「……………」

「……………」

沈黙が続くのが怖い。場合によってはこの家を出て行かなくてはいけないかもしれない。忍さんと花織さんには悪いが、やっぱり。

「…もし、智花ちゃんが嫌なら俺」

「嫌なわけではないです!」

突然の返答に俺は、目が丸くなる。急に声を上げられたのはもちろん、その答えが意外だった。

「私、昔からお兄ちゃんに憧れていて、ずっと欲しいと思っていたんです。徹さんが家に来る事を知ってすごく嬉しかった。こんなに素敵な人がお兄ちゃんになるんだって楽しみにしてたんです。だけど私

緊張してしまつて、全然話せないし嫌われたらどうしようつて不安だつたんです。でも、こうして話せるようになって、せつかくいい兄妹になれると思つていたのにそんな顔をさせたくなかつた」

涙を浮かべる智花ちゃんを見てようやく自分がどんな顔をしていたのか気づいた。部屋にあるスタンドミラーには、苦しそうな俺の顔があつた。

そうか、不安だつたのは俺だけじゃなかつたのか。なのに俺は、

「…っ!?？」

俺は、智花ちゃんの頭を優しく撫でた。

「ありがとう。こんな頼りないお兄ちゃんだけど、これからよろしくね。智花ちゃ…いや、智花」

「…っ。こちらこそよろしくお願いします。お、…と、徹さん…」

智花は、恥ずかしがりながらも、涙を拭い明る笑顔を見せてくれた。お兄ちゃんと呼ばれる日は、まだ先かもしれない。まあ、俺も慣れないから今のままの方が正直ありがたいけど。

これが、俺の運命を変えてくれた女の子、智花との出会いだつた。  
つづく

## 初登校！

障子の隙間からの朝日で目が覚め、身体を起こす。布団を片付けて、寝間着から高校の制服に着替える。そして、筆記具や教科書を学校指定のカバンにしまい込む。準備や身支度を整え、部屋を出ようとするうちようと反対側の襖が開いた。

「おはようございます！徹さん」

「おはよう。 智花」

部屋からは、ミドルショートで髪を片結びにした制服姿の智花が出て来た。元気な笑顔を向ける妹にならない、できる限りの明るい笑顔で、いつもの挨拶を口にした。狙っているわけではないが、毎朝部屋を出ると大体の確率で智花と最初の挨拶を交わす。生活リズムがもともと似ていたのかもしれない。

二人で広間の前に行き、襖を開ける。

「ん、おはよう二人とも」

「おはよう。 お父さん」

「おはようございます」

広間にはすでに忍さんがいて、新聞を読んでいた。毎朝の朝食やその他の食事も、この場所でみんな揃って済ませている。

「徹くんは、今日から学校だったね」

「はい。あの、学費の事とか本当にありがとうございました」

「うむ。父親として当然の事をしたままだよ。制服似合っているな」

「ど、どうも」

高校に通うための学費や、試験の料金などは忍さんが全て負担してくれた。何とかバイトをして必ず返すと言ったのだが、忍さんは首を縦には振らなかった。

本当に、優しい方だ。せめて、これ以上迷惑はかけないように俺は、勉学に集中する事を決めた。

「おはようございます。徹さん、智花」

部屋に入り、カバンを隅に置いて座ろうとすると、背後から声が出た。

「おっ、おはようございます。花織さん」

「おはよう。お母さん」

腰を下ろす前に、身体を戻し、花織さんの持っていた朝食の乗ったお盆を受け取る。

「ありがとうございます。ふふ、その制服姿とてもお似合いですよ」

「ありがとうございます」

今度こそ席について、部屋の真ん中にあるテーブルに食事を並べ始める。

「手伝います」

「ありがとうございます。智花」

すると横から、小さな智花の手が伸びてきてお米の入った茶碗を忍さんの方へ持つて行く。

「うふっ、本当に二人とも仲がいいですね。まるで新婚さんみたい」

「おっ、お母さん！」

花織さんは語弊のありそうな言葉を残して、台所へ戻っていった。

この家に来てからというもの、花織さんは度々俺と智花をからかってくる。俺は、もう慣れたが、智花は相変わらずの反応だ。

「それでは、いただきます」

『いただきます！』

花織さんが戻り、全員テーブルに着くのを見計らってから忍さんが食事の挨拶をする。それに合わせ、俺たちも挨拶をし、朝食を食べ始める。

「徹くんが通う学校は、家からだどのくらいかかるのかね？」

「20分ぐらいですね。歩きなので、8時ぐらいには出発しようと思えます」

急に話を振られ、ぴんと背筋が伸びる。時計を見ると針はちょうど7時半を指していた。時間にはまだ十分に余裕がある。

俺が、通う七芝高校は、この家から徒歩で通う事ができる距離に位

置する。電車やバスに乗らない分自分のペースで登校できるのでとても通いやすい。運動部の活動が盛んで、推薦で入学する生徒も多いそうだ。ちなみに、俺は普通の編入試験を受けて今に至る。すでに、入学式からは2週間程経っているため、今日から登校となると友達ができるか少し心配だ。大丈夫だろうか。

「あら。その時間だと智花が家を出る時間と同じですね」

そんな事を考えていると。花織さんが話に入ってきた。

智花は、徒歩10分ぐらいのバス停から慧心学園のスクールバスで登下校しているのだそうだ。

「あ、あのっ！もし、徹さんがよろしければ途中まで一緒に行きませんか？」

すると意外にも、智花から一緒に登校する事を持ちかけてきた。

こちらとしては、とても嬉しい事なのだが、年頃の女の子としては恥ずかしくなるものだと思っていたが、

「智花が、いいのなら、ぜひお願いするよ」

「はっ、はい！えへへ」

食事を済ませ、歯を磨き終える頃には時計の針が8時を指していた。玄関で靴に履き替えている智花を待ち、

『行って来まーすー！』

いよいよ、学校に向けて出発する。

家を出ると大通りまでは、一本道だ。しばらく道のりに沿って歩いて行くと、車通りの多い交差点に出る。

高校へは、俺から見て左の方角、智花の目指すバス停は、右の方角にある。智花と共に通学できるのはここまでだ。

「それでは、私はこっちなので」

「うん。じゃあまた家でね。行ってらっしゃい」

「はい！徹さんもお気をつけて」

智花は、深々とお辞儀をし反対方向に歩いて行く。途中で振り返っ

てこちらを見た智花に手を振り、俺も高校へ向けて再び足を進める。  
5分程度といった短い時間ではあったが、少し不安だった俺の心を  
落ち着かせるとても有意義な時間だった。勝手ながら智花への感謝  
を心に納め、教室での自己紹介などを考え始めた。

—————

忍さんへ言った通り、家から20分程で目的地に到着した。

ここが、俺が今日から通う、七芝高校。

来るのは受験を合わせれば二度目だが、緊張て来た時とは違う景色  
に見える。校門を抜けて、校内に入ると様々な運動部が朝練をしてい  
るのが見えてきた。校庭も広くて、流石は運動部が盛んな高校だ。以  
前は、校内を見学する時間もなかったので気付かなかったが、とても  
見応えのありそうな感じである。暇な時にでも校内を散策してみ  
か。

そんな事を考えながら、昇降口に入り靴を履き替える。

まずは、職員室で担任の先生に合わなくては。挨拶した後に先生と  
教室へ行く事になっているのだ。まだ、電話越しでしか話したことは  
ないので、どういう人なのかとても楽しみだ。

職員室に着き、ドアをノックする。スライド式のドアを開け、中に  
足を踏み入れる。すると、一人の先生らしき女性がこちらに気付き、  
近付いて来た。

「おはようございます。職員室に何の御用でしょうか？」

「お、おはようございます！あの、今日から七芝高校に編入する事にな  
った。高み、じゃなくて、湊徹です」

すぐさま、挨拶を返し自己紹介をする。苗字が変わった事に未だに  
慣れておらず、どうにも上手く言葉が続かない。

俺の前に立つその方は、髪留めでまとめたストレートヘアをし、鋭  
角な目鼻立ちで厳格そうなイメージである。ボタンを全て止めた

スーツ姿がまた、とてもクールなオーラを放出している。

「そう、あなたが。お待ちしていました。とりあえず、はじめまして。あなたが編入する七芝高校1年10組担任の、野火止初恵（のびどめはつえ）です」

この方が、今日からお世話になるクラスの担任なのか。

：厳しそうだなあ

「よ、よろしくお願いします」

とりあえず、敬意を表し頭を下げたまま返事を待つ。

「…ひとまず、教室へ案内します。まもなくSHRが始まりますので」  
面を上げると、野火止先生は教室に行く準備をすでに整えていた。  
俺は、先生に従い共に職員室を後にした。

先生の後に続き廊下を歩く。いよいよ本格的に七芝高校の学内へ。  
職員室を出て、数十メートル進むと、右側に上に上がるための階段が見えた。先生はその階段をタンタンと上がって行く。俺も遅れずにその後を追う。

すると、階段を上りきったところで先生の足が止まった。

「…湊くん」

急に止まった事に疑問を抱いていると、ふと先生に呼びかけられた。

「は、はい？」

失礼な事だが、正直まだ若干の緊張を先生に覚えてしまう。

「実は、私もこの学校には来たばかりなんです」

「…え」

野火止先生は、控えめな笑みをこちらに向けた。

それは、先程までのクールな印象を打ち砕く友好的な笑顔だった。

「私は、以前まで硯谷女学園という学校で勤務していました。そして、今年度からこの高校へ着任したのですけど、今まで女子校にいたせい  
か、ここではまだ少し緊張してしまっ。湊くんも少し遅れての入学  
で不安があるでしょうけど、お互い頑張りましょう。頼りないかも  
しれませんが、何かあれば言ってください」

「…あ、いえ、そんな。こちらこそ、よろしくお願いいたします」



すっかり呆気にとられつつも、再び頭を下げる。先程の職員室でのやり取りとは違い、とても有効的な雰囲気漂う。

ついに、教室の前までたどり着いた。先生は、先に入室して本日の連絡をしている。俺は、連絡が終わった後に教室に入る事になっている。

すう、はあ。深呼吸をし、心を落ち着かせて刻々と迫るその時間に向けて身構える。

『では、本日から同じクラスになる新しい生徒を紹介します。湊君』

いざーーーーーーー

キーン、コーン、カーン、コーン

無事、自己紹介をしてから時は過ぎ、本日の4限目が終わった。時期が時期なのかSHR後に色々な人に話しかけられはしたのだが、この時間にはすでに落ち着いていた。

やはり、入学式から一、二週間たったぐらいでは、転入生も目立たないのだろう。これからの時間は、昼休みだ。教室にいたほとんどの生徒は、学食に向かい、教室を退出していった。この学校では、弁当などを持参し教室で食べるか、学食で食べるかのどちらかで昼食を済ませます。

俺は、カバンから花織さんが作ってくれた弁当を取り出した。花織さんの作るご飯は絶品で、弁当もとても楽しみにしていた。

「昼飯一緒に食べないか？」

すると肩に手を置かれ、背後から声があった。振り返ると俺の後ろの席に座っていた人が昼食を誘ってくれた。

「え、いいの？」

「良いも、何もこっちから誘ってるんだけどな」

「じゃあ、どうぞ」

俺は、彼を促すように机の上にスペースを作る。後ろの席にいた彼は、自分の椅子を持って来て、俺の隣に腰掛ける。

「えーと、湊徹くんだったけ？徹って呼んでいいな？」

「あ、うん。君は確か、はせ…えと」

名前を覚えていてくれた彼に応えるために、1限目に入る前に行われた俺のための自己紹介を必死に思い出そうとする。

頑張れ俺の脳！せめて、周囲に座ってる人の名前ぐらいは頑張っ覚えてようとしていたじゃないか！

「ははっ。長谷川昴（はせがわ すばる）、昴でいいよ」

「じゃあ、よろしく。昴」

「こちらこそ、よろしくな。徹」

昼休み中は、昴と色々な話で盛り上がった。部活の事や、中学の事、今住んでる場所など。俺は、こうしてクラスメイトと話す事が出来てとても嬉しかった。

昴は、バスケット部に所属しているらしい。廃部寸前だったバスケット部を何とか立て直して、今や一年だけのチームでキャプテンを務めているらしい。俺も部に誘われたが、申し訳ないけど断らせてもらった。バスケット部でなくとも勉強の事もあるし、部活には入らないつもりでいる。いわゆる帰宅部というやつだ。

—————そして放課後。

「そんじゃ、今から部活だから。また明日」

「うん。頑張って」

あつという間に放課後になり、昇降口で体育館へ向かう昴と別れる。登校初日に、良い友達ができた。何とかこれからもここで、やつ

ていけそうでよかった。

学校を後にし、帰路についているとスマホに着信が、昴と連絡先を交換したが、部活中の彼からかかってからことはないだろう。誰からと思い、画面を確認すると家からの着信だった。

「もしもし？」

『あ、徹さん？学校の方はどうでしたか？』

電話の着信はは、意外にも花織さんからだった。

「はい！友達もできて、楽しかったですよ」

『それは、良かったです。あの、急で申し訳ないんですけど、帰りにスーパーで卵を買ってきていただけませんか？』

「あ、はい。構いませんよ。他に必要なものとかありますか？」

『そうですね。じゃあ、あと豆腐もお願いします』

「了解です。でわ、今からスーパーによってから帰ります」

『はい』

ピツ。

スマホをポケットにしまい。突然の買い物ミッションを遂行すべくスーパーを目指す。

スーパーの場所は、以前、花織さんの買い物に付き添いで行った事があるので、場所は覚えていいる。智花も、もう帰宅しているだろうが、陽も傾いてきているしおれが行くのが一番だろうな。

スーパーに着き、まずは卵、そして豆腐の順番でカゴの中に入れて行く。会計を終え、台の上でレジ袋に買った物をしまい込む。

すると、ある事に気がついた。足元に茶色い手帳のようなものが落ちていた。拾い上げると表紙には「慧心学園 初等部生徒手帳」と金色で書かれた文字と校章が中心に描かれていた。

慧心学園……。智花と同じ学校だ。持ち帰って智花に渡して、明日学校に持って行ってもらうべきだろうか。いや、もしかしたら落とし主がスーパーに探しに来るかもしれないし、スーパーに届け出た方がいいかもしれない。

とりあえず、名前とか書いていないか失礼ながらも中を開いてみる

事にする

ごめんなさい。心の中で謝りながら中を調べる。開いて見ると、表紙の裏に持ち主と思われる顔写真と共に名前や、電話番号などの個人情報、名前は……

「…竹中、夏陽くんかな？」

つづく

## 長い1日と勉強会！

さて、どうしたものでしょう。とある男子生徒の生徒手帳を拾ってから早10分が経った。もしかしたらまだ近くにいるかもしれないと思いい、店内を探してみたが、それらしい人物は見当たらなかった。

やはり、智花に頼むべきだろうか。落とした事に気付かず、家に帰ってしまったのかもしれない。それに、早く帰らないと花織さん達にも心配をかけてしまう。

とりあえず今日は、帰る事にしよう。

帰宅するために、自動ドアを目指す。自動ドアが開くと、外から走ってきた数人の男の子たちと入れ違いになった。

危ないなあ。いくら急いでるからって店内で走るのはどうかと思うぞ。

そんな無言の喝を店内を走り抜けて行った子供らの背中に訴える。視線を自動ドアの方に戻し、外に出ようとしたが、

「あれ？」

ふと、ある事が頭に浮かんだ。慌ててカバンにしまっていた生徒手帳を取り出す。今走って行った数人の中の一人と、生徒手帳の持ち主の顔写真が似ていたような気がしたのだ。

手帳を開き、写真を確認する。俺の予感は的中していた。案の定、今の男の子とそっくりなのである。あの慌てようを考えれば間違いなくこの手帳の持ち主だろう。

急いで俺は店内に戻り、男の子を探す。少し早足で店内を巡るが中々見当たらない。どこに行ったのだろう。普通ならサービスカウンターとかを指すと思っただがその周辺にはいなかった。

再び、入り口付近を探そうと思いい首を捻ると右手にあったフードスペースからあの男の子が走っていくのが見えた。これ以上見失うわけには行かないので、店内を駆け抜ける。先程の彼への喝は何処へやら、まさかこの歳にもなって店の中で走る事になるとは。

「君！ちよつと待って!!」

「うわっ!?!?」

何とか追いつき、男の子の肩を掴む。

「なっ、なんだよお前、離せよー!」

「君、竹中君だよね?」

まさか、小学生に「お前」呼ばわりされるとはな。結構、気が強い子のかもしれない。

「何で俺の名前知って…、もしかして不審者か!もし、そうなら警察に突き出すぞ」

すごいなこの子。いくら無邪気な子供だと言っても勇敢すぎるにも程があるぞ。正にこういった子が、将来は警察官になったりするのだろうか。

そんな事よりも、今はこの現状を打破しなくては。このままだと、本当に御用になりかねないぞ。

「まっ、まっつて!君、生徒手帳落とさなかった?」

「え?」

ようやく彼は、話を聞いてくれる気になったようでジタバタしていた体を落ち着かせる。俺も、彼に目線の高さを合わせるために屈みこむ。そして、手に持っていた手帳を差し出した。

「これ、俺の生徒手帳」

彼は、手帳を受け取り中を確認する。

「それ、買い物袋に、商品を入れるスペースに落ちてたんだ。名前を知ってたのは、中に持ち主の情報がないかと思つて開いたら書いてあったからで、勝手に見てゴメン」

よかった。とりあえず、大事にならずにすんだようで安心した。

今更ながら、卵は無事だろうか。無我夢中で追いかけたので、袋を何処かにぶつけてしまったのではないかと心配になり、すぐさま卵の無事を確認した。…ふう、割れたりはしていないようだ。

「あの、すみませんでした!」

急に、明瞭な声が目の前から聞こえた。

顔を上げると、竹中君が頭を深々と下げていた。

「俺、生徒手帳を落とした事に焦って、回りが見えてませんでした。せつかく拾ってくれたお兄さんに、失礼な事ばかり口走っちゃて。ホント、すみません」

「ぜ、全然大丈夫だよ。急に知らない人に掴まれたりしたら、不審に思うのは当然だろうし」

先程までの威勢が、嘘のように彼はシユンと肩をすぼめる。なんだ、すごくいい子じゃないか。それにしても、こちらも、どうしているのか分からなくなり、戸惑ってしまふ。

「おーい、竹中ー！」

すると、後方から彼を呼ぶ声が響いてきた。振り返ると、竹中君と同じ制服を着た子たちがこちらに手を振る。

「あつ、他の奴らも一緒だったんだ。すみません！俺、行きます。生徒手帳、拾ってくれて本当にありがとうございます！ありがとうございました」

彼は、もう一度一礼すると、俺の脇を駆け抜けて友人と思われる子たちのもとへ向かっていった。

なるほど、さつき竹中君といった子たちも一緒に探してたのか。色々あったが、ようやく一件落着だ。

さて、それじゃ俺も帰るとするか。

—————

ようやく家に着いた。

さっそく、靴を脱ぎ台所へ行く。

「ただいま帰りました〜」

台所へ入ると、花織さんは晩御飯の準備を始めていた。

今日のご飯は何だろう。

「徹さん、おかえりなさい。急なお使いを頼んでしまつて申し訳ありませんでした」

「いえいえ。いつも美味しいご飯を食べさせてもらつてるので、これぐらいの事はお任せください」

「ありがとうございます。ふふつ、頼りにしています」

俺は、卵と豆腐の入ったレジ袋を花織さんに手渡した。

花織さんは、それを受け取り、感謝の笑顔を向けてくれた。こうしてみると、やはり智花とそこはかたなく似た面影を感じる。

「あつ、お弁当すごく美味しかったです。すみません、昼食まで用意して頂いて」

「どういたしまして。育ち盛りですから、気にせずどんどん食べてくださいね」

「ありがとうございます」

花織さんは、卵と豆腐を冷蔵庫に入れ、夕飯の準備に戻る。さすがに、空の弁当箱を洗わせるわけにもいないので、花織さんに並び、水道で弁当箱を洗うことにした。

「徹さんは、お料理とかはなさるんですか?」

スポンジに洗剤を付け、泡立てていると花織さんが、話しかけてきた。

「はい。花織さんのように、上手にはできませんが、両親が共働きだったので、簡単なものならできますよ」

「そうなんですか。でしたら、今度一緒に料理してみませんか? 私、昔から自分の子供と料理するのが夢で、智花とも料理はするんですけど、お父さんが刃物は危ないからとお菓子作りぐらいしかした事がないので」

そうか。忍さんは、智花のことが大切なんだろうな。それにしても、忍さんも花織さんも、俺の事をもうただの友人の子供としてではなく、本当の子供として、受け入れてくれているんだな。なら、俺もそれに応えたい。

「俺でよければ、ぜひ」

「はい」



花織さんを見ると、柔和に微笑んでいた。

もし、料理をする時になつたら智花も誘おう。忍さんの言い付け通り包丁で切る作業は、任せられないだろうが、俺がいれば、一緒に作れるし楽しそうだ。二人も喜んでくれるだろう。

弁当箱を洗い終わると、台所の外から足音が聞こえてきて、

「あつ、徹さん。おかえりなさい」

振り返ると、智花がグラスの乗ったお盆を持って登場した。

着替えていないという事は、智花も帰ってきたばかりなのだろうか。

「さつきまで、智花の友達が来ていたんですよ」

なるほど、どうりでグラスがいくつもあるわけか。制服だったのは、放課後そのまま学友たちと家に帰って来たからなのだろう。

「あのつ、徹さん。後で私の部屋に来ていただけませんか？」

「うん、分かった。部屋にカバン置いて、着替えたら行くよ」

「ありがとうございます！お待ちしています」

智花は、流しにグラスを入れて、洗い始めた。

偉いなあ。この歳のうちから、自分の事をしっかりやれるのはすごいぞ。

俺は、テーブルに置いていたカバンを持ち、部屋に向かった。

制服から、部屋着に着替えて部屋を出る。部屋を出て目の前の智花の部屋の襖に手をかけ、一息に開け放った。

「……………ふえっ」

「な……っ……？」

そこで、俺が、見たものは。

慧心学園の制服を床に脱ぎ捨て、赤いミニスカートだけを身に纏い、今まさにTシャツを上に着ようとしている最中だった智花の華奢や姿。つまり、今の智花は、スカートを履き、上半身は下着姿が丸見えの状態になっていた。

「あ……あ……」

喉をか細く震わせながら、智花は全身を硬直させ、顔を真っ赤に舐め上げていく。

「ふあ、ふああああううっ!?」

「う、うわあああああつ!??ごめん!!」

俺は、ようやく我に返り、襖を全力で引き戻した。

…やっちゃまったー！ー！俺は、襖に背を向け頭を抱えながら蹲る。

まさか、智花の着替えを堂々と覗いてしまうなんて。よく考えれば分かる事じゃないか、俺が台所を出た時に智花はグラスを洗っていたのだから部屋に戻るのに時間がかかる。その後には部屋に戻るとなれば、今の時間帯は着替えていてもおかしくない。

「…徹さん。ど、どうぞ…」

しばらくすると、着替えが終わったらしく、部屋の中から智花に呼びかけられた。部屋に招き入れられて、何とも言えない重々しい空気が漂う。

「智花、ほんと、ごめんな…。部屋に入る前に声をかけるとか、考えて行動していれば」

部屋に入っただけなのに、俺は目の前の畳に額をこすりつけ、ひたすら謝罪を繰り返す。ああもう、妹とはいえ女の子の部屋に入るならもっと慎重にいくべきだったのに。

「い、いえっ！頭を上げてください。徹さんは、何も悪くないですっ！私がこれから着替えることを、事前に伝えていけば」

そんな俺を見て、智花は勢いよく立ち上がり、粗相を許してくれようとする。気を遣って、傷ついた心を隠し振舞ってくれているのだろう。なんて優しきだ。

「ありがとう。でも、完全に今回は俺の不注意だ。だから、謝らせてくれ」

「あ…、は…はい。ふあ、ふあう」

智花は、両手で顔を抑えながらこちらを見る。

そして、俺はようやく顔を上げて智花と顔を合わせた。

「それで、俺に用って何かな？」

こんな過ちをしてしまった以上。可能な事なら、ぜひ叶えてあげたい。

「は、はいっ！あの、実は。次の日曜日に、友達と私の家で勉強会をするんです。それで、徹さんに先生として一緒に参加してくれたらなと。そのつ、もちろん徹さんの予定とかが空いてればなんですけど」  
「分かった。全然構わないよ」

「本当ですか！よかったあ」

俺は、二つ返事で了承した。むしろ、ありがたいお願いだ。これで罪を償おうというわけではないが、それ関連のことなら得意分野である。精一杯努めさせてもらおう。

それにしても、この家に来てからというもの「妹」という存在には驚かされっぱなしだ。普通なら妹の友達が来るとなれば、部屋から出て来ないでとか言われるイメージがあった。あくまで、勝手な想像なのだが。

「では、お願いします。ふふっ、楽しみです！」

智花が、明るい笑みを見せてくれた事に、ひとまず安心した。

—————その夜、

いやあ、今日は色々あったなあ。初登校に、少し疲れた買い物、智花のきが…じゃなくて、勉強会。長い1日だった。

友達と一緒に勉強会かあ。智花の友達ってどんな子たちなんだろう。次の休みが楽しみだ。

俺は、そんな事を、考えながら眠りについた。

―交換日記(SNS)―

【湊 智花】『みんな。徹さん、日曜日大丈夫だって!』

【まほまほ】『よっしゃー!にちようびまでまちどーしー!』

【紗季】『そう、よかった。じゃあ、私も手作りのお好み焼きを持って行くわね』

【あいり】『わあ。私、紗季ちゃんのお好み焼き大好きだから、楽しみ』

【ひなた】『おー。ひなも、お気に入りのクマさんのバッグ持っていく』

【湊 智花】『じゃあ、日曜日お待ちします!』

つづく

## 智花の友だち

——日曜日、A M 11:30

暖かな春の日差しが、広間を照らす。

けれど、その景色だけでは俺の緊張を吹き飛ばしてくれる気配はなかった。

「そろそろ来る頃かな？」

「はい。お昼前に来るという話だったので」

本日家に訪れる来客たちを、妹の智花と広間で待っていた。

その来客というのは、智花の友達たちだ。今日は、そんなみんなと、家で勉強会をする事になっている。なんでも、智花の友達が俺に会ってみたいのだそう。それがキツカケで、今回の勉強会が開催される事になったのである。

俺は、みんなの先生という事で参加する。先生といっても授業のよいうな形式で教えるわけではない。一人一人が学校の宿題に取り組み、分からない問題を俺が解説するといった個別指導のようなものだ。

この事に関しては何の問題もないのだが、すごく緊張する。そもそも、智花ぐらいの年齢の子たちとは、こうして会うことがあまりないから。もしかしたら、大事な友人である智花の兄として、相応しいかどうか判断されたりしてしまうのだろうか。楽しみな反面、不安が押し寄せてくる。うう、そんな事を考えていたらさらに、緊張してきてしまったではないか。

だけど、学校の友達とはどんな風に話しているのか、普段は見られない智花の姿が見れるかもしれないと思うと、少しワクワクしてしまう。

「そういえば、本当にお昼ご飯は用意しなくても大丈夫なの？」

「はい。紗季…友達がぜひ、家のお好み焼きを食べてほしいって張り切っていて、全員分のお好み焼きを作ってくれてくれるそうなので」

智花の友達の一人は、家がお好み焼き屋をやっているらしいのだ。

その子自身も、家の手伝いなどで実際にお好み焼きを作ったりしているようで、友達の中でも評判がいいらしい。しかし、お客さんに昼食を持って来てもらうのはなんとも申し訳ない感じがしてしまう。

今日は家に忍さんも花織さんもないので、用意するなら俺が作るうと思っていたのだが、今回は智花の推薦もあって、ありがたく頂くことにしたのだ。

それにしても、慧心学園に通う生徒たちは、皆すごい生徒さんばかりだなあ。さすがは私立といったところか。

「じゃあ、お茶ぐらいの準備はしておこうかな」

「あつ、私も手伝います」

台所でお茶を用意しようと思いい、スクつと立ち上がると、智花もそれに合わせてついて来てくれた。

お茶っ葉と急須を棚から出して、お湯が沸騰するのを待つ。

「それにしても、俺も勉強会に参加しても良かったのかな？俺が教えるよりも、友達同士で教えあつたりした方が楽しくない？」

「そんな事ないです。徹さんの教え方はとても上手で分かりやすいので、いつも助かっています。それに、私も徹さんの事は紹介したいと思ってたので」

智花の方を見ると、優しい笑顔を返して見せてくれた。

「そっか。なら、俺も智花の期待に応えられるように、精一杯頑張るよ」

「ふえ…」

俺は、智花の頭を優しく撫でた。

すると智花は、頬を染め照れくさそうに目を逸らす。

いかん。自分でした事とはいえ、非常に照れくさい。ひとまず話題を逸らそうと思いい、何を話そうか考えていると、

ピンポーン、ピピピンポーン。

まさに、救世主とでもいうのだろうか。タイミングを計ったようにインターホンが連続で鳴り響いた。

「おつ、来たかな？」

「わ、私が見て来ます」

「うん。じゃあ、先にながって広間で待ってもらえる？俺もすぐに行くから」

智花は、はい！と元気な返事を俺に残し、台所を出て玄関へ向かった。とても嬉しそうでなによりだ。

数分後、お湯が沸騰したので、人数分のお茶を淹れて広間へ向かう。

ゆつくりと、襖を引いて中に入る。

『こんにちはー！』

「うおっ」

部屋の中のテーブルを囲むように座っていた少女たちは、声を揃えて俺を迎えてくださった。

「い、いらっしやい」

こちらは、元気な挨拶に押され気味になりながらも、なんとか言葉を絞り出した。

そして、お茶を一人一人の前に配り終わると、空いていたスペース、智花の隣に腰をかけた。

「とりあえず、初対面ですし、自己紹介から始めましょうか？」

やや緊張している俺を気遣ってくれたのだろう。智花がある提案をしてくれた。

心配そうに見つめる智花に頷き、俺が率先して口を開く。

「えと、みなさんはじめまして。智花の兄の湊徹です。一応、旧姓は高嶺といえます。15歳、高校一年です。えーと、今日はみんなの先生として、よろしくお願いします」

ぱちぱちぱち、挨拶を終えるとみんなの温かな拍手が鳴り響いた。小学校時代の自己紹介を思い出す。

「はいはいー！じゃあ、次あたし、あたしー！」

さて、次はと思っていたところ、智花の隣に座っていた二つ結びの子が元気に手を挙げた。

「三沢真帆（みさわ まほ）ですー！あたしの事は、真帆かまほまほっ

て呼んでっ。それから敬語は禁止ね！」

真帆さんは、立ち上がって白い歯を溢れさせた。

活発なイメージの子である。インターフォンを押したのもおそろくこの子だろうな。

「よろしくね。真帆さん」

「あー！さん付けも禁止ー。ちなみにみんなにもだからね！」

「じゃあ、…真帆で」

「うん！よろしくね、とーにいつ！」

結構無邪気な感じなのかな。どうやらこの子は他人に対して壁を作ろうとはしないタイプのようだ。それと「とーにい」というのは、ニックネームだろうか。なんとも安易なネーミングセンス。いや、良い意味で。

「じゃあ、お言葉に甘えて、他のみんなの事も呼び捨てにさせてもらってもいいかな？」

そうすると、他の子たちも一人一人が頷いてくれた。

よかった。とりあえずは、怖い印象とかは持たれていないようだ。

「では、次は私ですね」

次に、真帆の隣に座っていた子が立ち上がる。

眼鏡と、腰に届かんばかりの三つ編みの子である。

いかにも、文学少女感があるイメージだ。

「はじめまして、お兄さん。トモの友達の永塚紗季（ながつか さき）です。クラスでは、学級委員長をやらせて頂いています。よろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしく」

実際に声を聞いて思ったことがある。声がよく通り、澄んでいた。とても耳に心地いい。学級委員長というのも納得だ。

続いて、肩に掛かる長さのオーソドックスなボブカットをし、おどおどした様子の子が立ち上がる。

「か、香椎愛莉です。占いとかが好きですっ。よ、よろしくお願ひしまうっ。あ…」

緊張してしまっているのか、最後の方で噛んでしまったようだ。顔



を赤面させて席に着いてしまった。

この子は、他の子達とは明らかに違う点がある。とにかく背が高い。見た感じ、170cmぐらいの俺と差ほど変わらない。小学生でこの身長であれば、バスケットかバレーではまさに逸材といえるだろう。

しかし、この子に関しては、事前に智花から一つ説明を受けていた。なんでも、高身長がひどいコンプレックスみたいなのだ。だから、身長に対しての話題は避けて欲しいと言われていたのだ。

「占いかあ。俺も、子供の時流行ってたなく。よろしくね」

何とか、第一印象とは、違う話題で乗り切る事ができた。これからも気をつけよう。

そして、最後の子が立ち上がる。

「おー。ひなはひなた。袴田（はかまだ）ひなた。徹、今日はよろしくお願ひします」

「よろしくね。ひなたちゃん」

ひなたちゃんは、とびきり小さい女の子だ。ふわふわと緩いウェーブのかかったロングヘアが、お人形さんのように可愛らしい見た目の子だ。しかし、年下の子に呼び捨てをされるとは。別に悪いわけではないが、なんとも妙な感覚だ。

なぜだろう。他の子たちよりも小さく見えたからだろうか。無意識にちゃん付けで呼んでしまった。さっそく呼び捨てのルールを破ってしまう。なぜかみんなが納得したようにこちらを見てくる。だが、その事に反対する子は真帆を含め、誰もいなかった。

その後、ひなたちゃんには、無垢なる魔性（イノセント・チャーム）という二つ名がある事を知った。名前の由来を聞いて、皆の反応に納得がいった。どうやら、無意識の内に、無垢なる魔性の餌食となってしまうらしい。

全員の挨拶を聞き終えた後、少し談笑をしながらしっかりと顔と名前を一致させる。智花の話では、5年生の頃から全員同じクラスになったのだそうだ。みんな仲が良さそうで、安心した。もし、喧嘩と

かになつたら正直止められる自信がない。では、おしゃべりはこれくらいにして早速本題に入ろう。

「それじゃあ、みんなで宿題始めちゃおつか。分からないところがあつたら聞いてね」

『はい』

そうすると、各々がテーブルに教科書とノートを広げて勉強を始める。俺も、自分の宿題でもやろうとテーブルに置いていたノートを開く。

「とーにいつー！」

「わー！」

開始5分、突然真帆が、俺の首に飛びつくように腕を回し、背中に身体を押し付けてきた

「まつ、真帆っ。どこか分からない問題でもあつた？」

「ねー、ねー。もう休憩にして、紗季の作ってきたお好み焼き食べよー」

頬に触れる髪の毛の感触で、緊張感を頂点に立たせられる。体が反射的に硬直した。

「で、でもまだ5分ぐらいしか経ってないよ？」

「あたしの、頭がもう限界だー！」

マジか。もともと、ぶっ通しで一時間とか二時間の勉強を小学生相手にやらせようとは思っていなかったが、こんなにも早くギブアップ宣言されるとは。とりあえず、三十分ぐらい様子を見てからお昼を挟もうとは思っていたのだが。

「もう少し、頑張れない？」

「んー、問題が難しくて分かんない〜」

真帆はぐりぐりと首元に額を押し当ててきた。地味に摩擦が熱い。どうしよう、先にお昼にした方が良かったかな。でも、まだ少し早い気もするし……

「ああもう真帆、お兄さんが困ってるでしょ。離れなさい」

「うえっ……っ！」

スツと背中中の重みがなくなった。振り返ると、紗季が真帆の服を引つ張り、真帆を剥がしてくれた。

「もう。…ごめんなさいお兄さん。こいつ勉強がすごい苦手で。悪い気にさせちゃったらホントごめんなさい」

「いや、大丈夫だよ。少し驚いただけで、気を悪くはしてないから」  
「だったら、良かったです」

なんとか、笑みを作り、全員に愛想を振りまく。別に勉強を嫌いなことに怒ったりしない。ただ、先生を務める以上、こちらにも責任がある。せめて、宿題を少しでも終わらせてあげたい。

「じゃあ、真帆。どこが分かんないのか言ってみな。教えてあげるから」

「えー」

「それが終わったら。お昼にしよう」

「うーん。…じゃあ頑張る」

真帆は、自分のプリントを持ってきて俺の横に座った。なんだ、素直で良い子じゃないか。

紗季も、安心したのか。一礼して「おねがします」と告げ、席に戻る。

「このこと、このこと、ここが分からない」

真帆が持ってきたのは、国語の問題だ。

前半は、漢字の書き取りなので、国語辞典を使わせる事でなんとか終わらせる事ができた。

しかし、

「ここでの、作者の考えを答えよとか意味わかんないしっ！作者じゃないんだから、分かるわけじゃないじゃん！お腹空いたー、とかかもしれないじゃんっ！」

真帆がプリントに指を指しながら、抗議を始めた。

最後の問題は、「最初はゆっくり自分で考えてみな」と進めさせていたが、やはり無理だったようだ。

真帆が叫んでいる間に、愛莉に質問された、算数の問題の解説を終わらせ、再び真帆の元へ。

「真帆、落ち着いて文章を読んでみな。下線の近くにヒントがあるから」

俺は、真帆の後ろから、文中の下線を指差して助言をした。

「むむむむむむむ」

真帆は、教えた場所を食い入るように見つめて考え始める。

—————

「できたー！」

しばらくして、真帆の課題が終わったらしい。

まだ、全部が終わったわけではないようだが、なんとか一段落付いたようだ。時計を見ると、すでに12時半を回っていた。

ここまでは、ほとんど真帆の説明に時間を費やしたので心配だったが、他の子たちはあまり躓く問題はなかったようだ。

智花は、昨日の内に質問にも来てくれていたので、大体終わらせていたからか、すでに宿題を終了させていた。紗季も終わったようで、途中からは、ひなたちゃんに教えてくれたりして手伝ってくれていた。愛莉もひなたちゃんも、残るはあと数問で、あと少し頑張れば終わらせられるだろう。

だが、その前に。

「それじゃあ、今からお昼にしようか」

『はい』

声を揃え、みんな待つてましたとばかりに手をあげる。

とりあえず、前半戦は終了。

次は、俺も楽しみにしていた、ランチタイムだ。

つづく